アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所　羅田　享

今回扱うアニメ作品：シン　エヴァンゲリヲン　劇場版

その 3

今回のテーマ

シンジの心の喪失と再生について考えていく

前回のおさらい

　エヴァンゲリオン Q においては、破でシンジが経験してきた相次ぐ喪失（思春期の喪失感情と結びつくもの）を受け入れられず、シンジ自身がニアサードインパクトを引き起こし、その事実を知った真実はシンジは絶望の淵に追いやられてしまう。

　その後、カヲルの世界を取り戻すという提案でエヴァに一緒に乗り、槍を抜くことになったが、シンジは槍を引き抜くことで、フォースインパクの引き金をひいてしまう。世界が崩壊していく様を目の当たりにし、シンジは自分が、万能空

想のなかで起こしてしまったこと、これまで述べてきた様に妄想分裂ポジションの中にとどまり、槍を引き抜いてしまったが、そこでようやく自分の犯した過ちに気がつき、そのことに加えカヲルというそのとき無二の親友をも喪失してしまう。その現実を直面し苦悩してしまう。

　シンジは槍を抜くという自分の犯してしまった過ちを痛感し、強い絶望感を抱き、そのことに加え、これまで強い結びつきを感じてきたカヲルも死んでしまう。そのあまりの強い喪失ゆえに受け止めきれず、自分では、どうすることもできない強い無力感を感じている。一方で自身が犯してしまった罪の意識も感じており、周囲を迫害的に捉え、再び退行していくこともできない。妄想分裂ポジションに戻ることも抑うつポジションに進むこともできない。どちらの心性にもいくことができず、シンジは絶望の中で身動きが取れず、なにか、もぬけの殻のような状態になってしまう。

　今回のシン・エヴァンゲリヲン　劇場版は、そうなったシンジの喪失に伴う心の再生と成長を描いている様に感じられる。

そこでボウルビィの悲哀の心理過程を説明した。

悲哀の心理過程（喪の作業）【J.ボウルビィ】

①無感覚・情緒的危機の段階（激しくショックをうけている）

②思慕と探求・怒りと否認の段階

（対象喪失を認めず、失った対象が存在するように振る舞う）

③断念と絶望の段階（激しい失意、抑うつ的体験）

④離脱・再建の段階（喪失を受け入れ、立ち直り始める）

→シン・エヴァンゲリヲン　劇場版（以下　シン・エヴァと略）の冒頭のシンジは③の段階にある様に感じられる。

　また、Q の最後でアスカは「ガキシンジ。助けてくれないんだ。私を。また自分の事ばっかり。黙ってりゃ済むと思ってる」と言っているが、それはアスカが本当は心は弱く、孤独で寂しく、それ故にその思いをシンジに受け止めてほしいと思っているからこそ言った言葉の様に感じられる。シン・エヴァではシンジの

心の再生と成長が描かれている一方で、上記の様なアスカのシンジへの思い、そしてシンジが成長し、その思いを受け止めていくというサイドストーリーもある様に考えられる。

シン・エヴァを通して、アスカは自身の感情と向き合い、成長していく姿が描かれている。特に、シンジと再会した際の複雑な心境や、塚田さんが述べたシンジへの想いを告白するシーンは印象的である。そしてシンジもまた、自身の弱さと向き合い、成長していく姿が描かれている。最後にアスカの告白を受け止め、彼女の気持ちを理解しようとするシーンは、シンジの成長を象徴していると言える。

２．シンジが目を覚ました時、周囲の状況はどのような反応であったか？

（Q と同じテーマ）

絶望に打ちひしがれていたシンジが、目を覚ますと犬は人に慣れた様子で嬉しそうに吠え、幼児は無邪気に好奇心を抱いてみている。そして白衣姿のトウジが心配した様に接し、周囲の人々もシンジを暖かく迎え入れる。

→シンジにとって受容的な環境になっている。

　そして周囲の人たちトウジ、委員長、彼らの娘ツバメたちのやりとりは和やかで、アットホームな雰囲気がある。そこはQの冒頭部の鈴原サクラが未確認生物の様な対応をして、ミサトをはじめ周囲のWILLEの人たちの殺伐とした雰囲気とは対象的である。

　そしてトウジの家では皆が食事を食べたり、お酒を飲んだり和気藹々（わきあいあい）としているが、シンジは部屋の片隅で、一人離れていた状態で両膝を抱えたままうずくまっている。しかし皆、シンジの存在に気にかけている。

→この点も対照的である。Q ではシンジが WILLE の人々と関わろうとしているが、「みそっかす」扱いをされ、孤立しているのに対して、シン・エヴァではシンジを暖かく迎え入れているのもかかわらずシンジは自ら距離をとって殻に閉じこもっている。

その中でトウジの義父が怒り出す

義父「シンジ君！　無口はいい。だが出された飯は食え。それが礼儀だ！」

トウジ「まあ、オヤジさん。無理に飯に誘ったワシもいかんかった。今日はそっとしとったってえや」

義父「しかしトウジ君。これだけ貴重な飯をもらっといて一口も食わんとは、失礼にも程がある。なあシンジ君！」

委員長「お父さん、ツバメが起きるわよ。さ、後片付けして、布団敷きましょ。ほらあなた、そっくりさんと碇君の分も」

ケンスケ「いや、碇は俺が引き受けるよ。その方がよさそうだ」

【考察】

　色々な点が Q と対比して描かれているように感じられる。どちらもシンジの孤立が描かれているが、Q では周囲が迫害的に描かれ、シンジが排除されてい

る様に描かれているのに対して、シン・ヱヴァでは周囲はシンジに対して受容的だが、シンジ自ら距離をとり、孤立している様に描かれている。

　ここで、Q からシン・ヱヴァに変わる過程でシンジの心性は妄想分裂ポジションの迫害不安から抑うつ不安に変化している様に感じられる。

妄想・分裂ポジションの迫害不安：外の誰か、何かしらの脅かし

→他者への恐怖であり、自身の内的な心の痛みではない　激しい崩壊の恐怖

抑うつ不安：悲哀、罪悪感、無価値、絶望、無力

→対象の喪失に伴う感情であり、対象喪失の事態に自分が関与した気づき

抑うつ不安が生じる背景には、自身の不完全さの感覚がある、それは自分の限界を知る感覚であり、万能感、万能空想の放棄→そこに悲嘆、無価値観、絶望感が生まれる。

　この取り巻く世界をシンジの心の世界を投影したものだと捉えたとき、迫害から受容に大きく変わっている。けれどもシンジは（自責の念や贖罪の念を抱き

苦しみもがいている）その中でどの様に振る舞えばいいのか解らず、閉じこもっている様に感じられる。

　シン・エヴァにおけるシンジはその抑うつの感情に苛まれ、それゆえ、身動き取れなくなっている様に感じられる。しかし周囲の人々はシンジに対して受容的である。トウジの義父は怒り出すが、それは迎え入れようとしているにも関わらず反応しようとしない怒りであり、Q の WILLE の人々の排除する感じとは違っている。そしてシンジ自身もこれまでと違って受容的であるという様に感じ初めているように感じられる。それはとりもなおさず、抑うつポジションへの過渡期の様にも感じられる。

以下のケンスケの言葉が象徴的である。

「意外だったろ。トウジと委員長が結婚したのは。中学のときはケンカばっかしてたもんな。まあきっかけは、ニアサードインパクト。その後の苦労が二人の縁結びだ」

「碇、ニアサーも悪いことばかりじゃない」

１）シンジが覚醒後、アスカとの初めての対面（Ｑと同じテーマ）

トウジの家庭の中に溶け込めないシンジをケンスケが引き取り、ケンスケ家に招かれ、シンジがその建物の中に入るとアスカが裸の姿で水を飲んでいた。

アスカ「ふん、私の裸よ。ちっとは赤面して感激したらどうなの？」

　シンジは硬直したまま何も言わない。アスカは柄杓を水瓶の蓋に叩きつけて、吐き捨てるように言う。

アスカ「ったく！　ケンケンもこんな鬱陶しいヤツ拾ってきて物好きね」

　ケンスケが裏口から戻った。アスカは仁王立ちで裸を隠そうともしない。

ケンスケ「ただいま。ああ、先客だ。しばらくうちにいると思う。諸事情あって式波は村には顔を出せないんだ」

アスカ「別に、リリンが多くて鬱陶しいだけよ」

　その時、シンジはアスカの首に巻かれた黒い帯に気づき、カヲルが亡くなったときのことを思い出す。

シンジ「うっ！　うはっ、うえぇっ」

　シンジはその場で嘔吐し、うずくまる。

アスカ「ＤＳＳチョーカーにだけ反応ありか」

アスカ「ケンケンそいつを甘やかし過ぎ。そんなの自分で拭かせなさいよ」

ケンスケ「碇は今、食べないし、自分から何もできない。よほど辛いことがあったんだろう」

　ケンスケは、手を汚すことにも苦労を見せない態度で、淡々とシンジが吐いたものを拭いていく。

アスカ「そんなのいつものことじゃない。そうやって心を閉じて誰も見ない。こいつの常套手段でしょ。放っときゃいいのよ。どうせ生きたくもないけど、死にたくもないってだけなんだから」

ケンスケ「碇、今はそれでいい。こうして再開したのも、何かの縁だ。好きなだけ頼ってくれ。友達だろ」

ケンスケ「俺は碇が生きていてくれて嬉しいよ」

【考察】

躁的防衛で再びインパクトを起こし、トウジ、ケンスケを始め、市井の人々は大変な被害を被ったが、Q の Wille の人々と違って皆、シンジに対して非常に受容的である。その中でシンジに激しい陰性感情をぶつけてきたのはアスカである。それは市井の人々の抱く怒りの代弁の様にも感じられる。しかしその思いをケンスケは暖かく包み込んでいる。その様は周囲の人々が愛と憎しみの葛藤を抱き、愛の中に憎しみの感情を収める心の動きが起きている様に感じられる。まさに抑うつポジションの心性が起きている。トウジ、ケンスケたちが大人の姿になって登場してくるのはなにか象徴的である（成熟の象徴）

一方で、シンジの視点で見たときに、これまでシンジは周囲に対して迫害的に感じており、心を閉ざしてきたものと考えられる。シンジが閉ざしていることは変わらないが（このシーンでは身体的にも身をかがめ殻に閉じこもっている）、シンジに対して周囲の人々が思いやりの心を持って接している様に、シンジは感じているのではないかと考えられる。

シンジの外見状は変わらないが、心が変化している様にも感じられる。

ちなみにこのシーンも序でシンジが綾波の裸を目の当たりにし、赤面するシーンを彷彿とさせる。序では、シンジは綾波に心を開いたように描かれているが、ここではアスカに対して関心を示していない。さらに、DSS チョーカーに反応するのは、カヲルの喪失を受け入れられないことを示唆しているようにもみえる。つまり、綾波とは異なり、アスカはシンジを変える存在になっていないどころか、完全に存在をシンジにスルーされているようにみえる。それはアスカにとって、大きな衝撃だったと考えられる。

その後、綾波（そっくりさん）が市井の人々との関わりが描かれていく。
綾波をシンジの写し鏡と捉えたとき、それは今までとは違った、新しいものを取り入れ、再建の段階にシンジの心は進みつつあるのではないか？と考えられる。つまりその後の綾波の変化はシンジの心の変化を表している様に感じられる。

３．綾波は市井の人々との関わりの中でどの様に変わったか？

シンジがうずくまって殻に閉じこもる一方で、綾波は市井の人々と関わり色々

なことを素朴に尋ねていき、徐々に新たな発見をしていく。

１）委員長（ヒカリ）が授乳をしているところで、綾波が色々尋ね、自分には授乳ができないことを知り困惑するシーン

綾波：分からない。綾波レイなら、どうするの？

委員長：あなたは、綾波さんとは違うんでしょ？　だったら、自分で思ったことをすればいいの

　レイの瞳が見開かれた。今まで考えようともしなかった設問に、彼女はしばし無言になる。

綾波：違って、いいの？

２）畑仕事した人たちと一緒に風呂に入るシーン　１

「風呂って不思議。ＬＣＬと違って、ポカポカする」

「私、命令がないのに生きてる。なぜ？」

３）親子が、手を取り合う姿を見て綾波が問うシーン

綾波：あれは、なに？

委員長：そうね、仲良くなるためのおまじない

　そう言うと委員長はそっと右手を差し出し、綾波は右手を、そこに重ねる。

４）畑仕事した人たちと一緒に風呂に入るシーン　２

綾波：私の名前？

人々１：うん。いつまでも〝そっくりさん〟というわけにもいかんからねえ

人々２：先生の話やと、自分の名前を忘れとるそうやけど、じゃったら自分で新しく付けたらどうなの

綾波：名前、付けていいの？

【考察】

　綾波は色々な集落の人々に色々なことを尋ね、彼ら彼女らの言葉一つ一つに心揺さぶられていくが、それだけ彼女を取り巻く外界が新鮮に感じられ、新しい

発見の連続であるかの様に描かれている。それは今まで「命令に従う」という受け身的（超自我に支配されていたともいうべきか？）であった綾波が徐々に主体的、能動的になり、積極的に外界の刺激を取り入れようとしている様に感じられる。１）から４）にかけて時系列的に綾波の言動を列挙したが、分離個体化し、徐々に他者と関わりを持ち、自身に主体性が立ち上がっていく様を描いているように感じられる。とりわけ４）の名前をつけるということは自身のアイデンティを持つことであり、確固とした自我を持ち、主体性の立ち上がりを象徴している様に感じられる。

（cf　千と千尋の神隠し　）

　そしてこの綾波の心の成長に関して、綾波とシンジを表裏一体と考えたとき、シンジの心の成長を描いているとも考えられる。また、綾波の心の成長の一方で、うずくまったシンジと一緒にいて、常に苛立ちを隠せないアスカのシーンは対照的である。

　そして心が成熟した綾波とシンジが交流し、シンジに心の変化が生じる。

4. シンジの心は綾波との交流の中でどう変化していったのか？

１）まず、綾波とシンジの対話

綾波：碇君はなぜ、村に戻らないの？

綾波：碇君も、ここで何もしてない。あなたもこの村を守る人なの？

　シンジは微動だにせず膝を抱えて座っている。そしてなにか今まで貯めていた思いを吐き出すかの様に激しい口調でいう。

シンジ：守ってなんかいない。何もかも僕が壊したんだ。もう何もしたくない。話もしたくないんだ。もう誰も来ないでよ！　僕なんか、放っておいてほしいのに！

シンジ：なんでみんな、こんなに優しいんだよ

綾波：碇君が好きだから

　シンジは、はっと息を呑んでレイの方へ振り返った。

綾波：ありがとう。話をしてくれて。これ、仲良くなるための、おまじない

　綾波はシンジを見つめ、そっと右手を差し出す。シンジは堪えきれずに、嗚咽して泣き出す。

【考察】

ここは心が成長した綾波がシンジを包み込んでいる。シン・エヴァではシンジを取り巻く人々は、皆、彼に対して温かく優しく接していたが、それゆえにシンジは自分が犯した罪は決して許されるものではないと考え、殻に閉じこもっていた様に感じられる。けれども本当はシンジは自分のその苦しい思いを受けてめてほしいし、共有したいと感じていた様に感じられる。

　「誰も来ないでよ」「放っておいてほしい」と強く言ったシンジだが、自分の

苦しみなんて、結局誰も受け止めてくれやしない、触れられて、これ以上傷つきたくないからこそ放った言葉であったと考えられる。

　だからこそ綾波の言葉「碇君が好きだから」「ありがとう。話をしてくれて。」という言葉は非常にシンジの心を揺さぶったのではないだろうか？

→シンジは心を閉ざすことをやめ、トウジやケンスケが暮らす生活に入り込んでいった。それはシンジが現実世界を受け入れ、今後立ち向かうであろうシンジのエディプス葛藤への第一歩を踏み出したとも考えられる。